



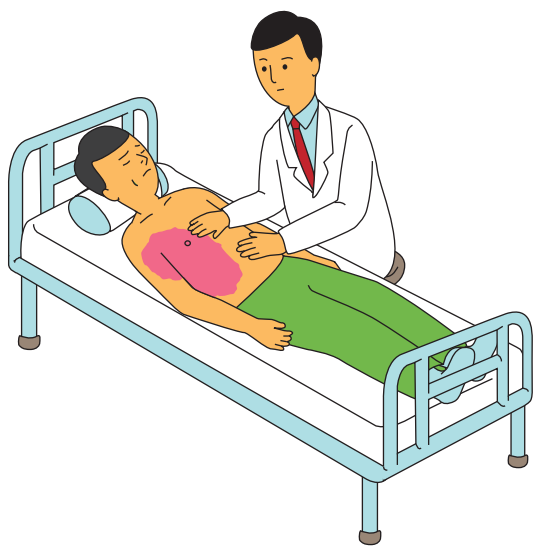
軽度の熱傷処置

頻度 ★★★ 重要度 ★★★★★ 難易度 ★☆☆ 10分 1人

はじめに

高温の物体にさらされると、組織が障害されて熱傷が生じる^{*1}。熱傷には、日常で遭遇する軽度のものから、まれではあるが、単に皮膚にとどまらず全身状態にまで影響を及ぼす重度のものまである。熱傷患者に対しては早期に重症度を判定して、外来治療が可能か、それとも入院か、あるいは専門施設に転送する必要があるのかを、まず判断しなければならない^{*2}。

本章ではその際に必要な重症度判定と、外来で治療可能な軽度の熱傷処置に関して解説する。初期治療として気道確保、輸液、さらには減張切開などの緊急処置を必要とする場合もあるが、通常そういった症例は最初から熱傷センターなどに搬送されるので、その場合の解説は他書に譲る。軽傷であると判断しても、常に全身状態の把握に努めて、適切な処置を取らなければならない。また、局所に対しても適切な治療を怠ると、後に述べるような合併症を生じてQOLを損なう場合があるため注意が必要である。



熱傷患者をみたら、全身状態を把握するとともに、深達度と面積から重症度を判定、外来で治療できるか判断する

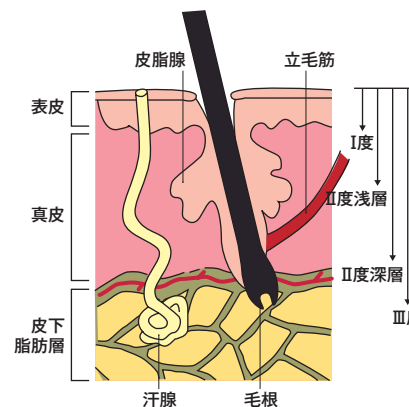
*1 その他、化学物質による熱傷、放射線による熱傷、電撃による熱傷などがある。また、低温の物体でも長時間さらされると熱傷を生じる（低温熱傷）。日焼けも日光による熱傷である。

*2 後述のArtzの基準が参考になる。

重症度判定

1. 熱傷の深達度診断

熱傷の深達度診断は日本熱傷学会の分類による^{*3}。Ⅱ度熱傷は浅層のもの（superficial dermal burn；SDB）と深層のもの（deep dermal burn；DDB）に分かれるが、その鑑別は難しいことが多い。ピンプリックテスト^{*4}や抜毛テスト^{*5}での鑑別も行われているが、治療までの期間がⅡ度浅層とⅡ度深層では異なることによって、後から判定されることも多い。受傷機転からもある程度の推測はできる^{*6}。



*3 時間とともに変わることもあるので注意。Ⅱ度熱傷が治療の過程で、感染や乾燥、物理的刺激によりⅢ度熱傷に進行しうる。

*4 23 G程度の針で創部を刺し、疼痛があるかないかで鑑別する方法。

*5 創部の体毛を抜く際、痛みと抵抗を感じるかどうかで鑑別する方法。

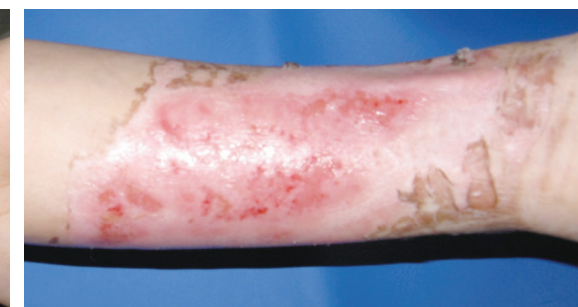
*6 湯たんぼなどによる低温熱傷はⅢ度熱傷を生じやすい。

熱傷の深達度診断

	深達層	症状	皮膚の変化	治療までの期間	後遺症
I度	表皮	疼痛	紅斑	1週間程度	まれに色素沈着
Ⅱ度浅層	真皮中層まで	強い疼痛	水疱（底部発赤）	1～2週間	ときに色素沈着、色素脱失
Ⅱ度深層	真皮下層まで	知覚鈍麻を伴う	水疱（底部白色）	1～2カ月	肥厚性瘢痕
Ⅲ度	皮下脂肪層まで	無痛	水疱なし、炭化あるいは羊皮紙様	2カ月以上	肥厚性瘢痕、拘縮など



Ⅱ度浅層熱傷
水疱底は赤みを帯びている。



Ⅱ度熱傷（浅層と深層の混在例）
水疱は破れている。一部の水疱底は白色調。



Ⅲ度熱傷
水疱なし。受傷部位は白色で少し光沢を帯び、羊皮紙様と形容される。



低温熱傷